# 『感情教育』における「借金」の役割に関する一考察

## ——行為の連鎖——

中野　茂

——「(…) 我々の惑星は、金銭のために近い将来居住不能になってしまうでしょう。なぜならば、どんなに富める者でも、自分の財産に気を配らずしては生きていけなくなるでしょうから。」(傍点は原文イタリック)[1]——

## はじめに

ルイ・アラゴンが「サンチームの教育」(l'*Educ'centime*) と揶揄し[2]、社会学者ピエール・ブルデューによってもっぱら経済的側面から分析のメスを入れられている[3]『感情教育』において、ほとんどすべての作中人物が金銭貸借の共犯関係によって結びつけられているといっても過言にならないほど、「借金」という経済的現実は、この小説の広大な物語空間の展開に無視しえぬ、というよりきわめて重要な機能ないし役割をはたしている。アルヌーもモロー夫人も金貸しのダンブルーズやロックから借金をしているし、主人公フレデリックにころがり込んだ遺産を狙ってその一部を彼から借りようとたくらんだデローリエやユソネは、おなじ魂胆のアルヌーにしてやられる。ヴァトナ嬢とロザネットとの間の貸借関係は第三部で明かされ、ほかならぬフレデリック自身が第一部ではデローリエに、第三部ではデュサルディエに借金をしているありさまである。そのほか、フレデリックのロザネットへの貸与、ロザネットの女中からの借金、アルヌーからのユソネの前借等々、数えあげていけばきりがないほど、小説空間は細かい金銭貸借関係の織りなす網に覆われつくしている。「借金」は、ただ単に、『感情教育』において小説世界の背景としての役割しかになわされていないわけではない、と言わなければならないだろう。

一方でフロベールが理想とした小説世界とは、外部の世界から独立し、その内部では、作家の介入なしにすべての単語が、文が、シーンが響き合い影響し合いながら、純粋に内的エネルギーによって展開していくような、いわば交響曲にもたとえられる世界ではなかったろうか[4]。言い換えると、たった一単語を変えるだけで小説世界全てが一変してしまうような「有機的」、「自律的」世界を作りだそうとしたのではなかったか[5]。フロベールは『感情教育』開始直後、ある作家の作品をとりあげて、「どうして彼ら（=作中人物たち）に、それまでのいきさつと自然に結びつく結末を、見つけてあげなかったのでしょうか」(下線は引用者)[6]と批判し、またその三年後にも、同じ作家の作品に関して、「(…) どうしてルブラン夫人はドナシィアンとの結婚を

望まないのか、人々には理解されません。彼女が誓いをたてたからですか? それにしても誓いをたてたわけは説明されていません。」(下線は引用者)[7]と指摘している。さらに、同様の指摘は友人アメリー・ボスケの作品に対してもおこなわれる――「どうして最初の描写、ジュミエージュ近郊の描写のことですが、この描写はこの書物のいかなる作中人物にもまったく影響を与えていないのですか(…)」(下線は引用者)[8]――が、まさにこうした批判こそ逆に、フロベールがみずから追求した原則、すなわち、『感情教育』の小説空間にあって、すべての要素はたがいに影響を与え合い、密接に結びつき合いながら物語を展開させていく原則を雄弁に語っているといってよい。すべての要素が影響し合いつつ、作家の介入なしに、ただ物語の内的モーターそのものにつき動かされて展開していく自律的世界[9]を作りだすこと、これこそがフロベールの『感情教育』執筆時の主要な課題の一つであった。一方、『感情教育』はフレデリックを中心とした作中人物たちの生きざまを約30年にわたり物語っている以上、自律的世界を形成するうえで不可欠な要素は、何といっても、影響関係ないし因果関係によって織りなされていく「行為の連鎖」でなければならないはずである。

冒頭に指摘したように、『感情教育』において、「借金」は作中人物の人間関係にふかく関わりあっている。その経済的現実は一方で只今触れた「行為の連鎖」とどのように結ばれあい絡みあっているのだろうか。換言すれば、フロベールの理想とする自律的小説世界の構築にポジティヴにはたらいた「借金」の機能と効果を検証すること、これが本稿の趣旨である。

## I

「たとえばピストルの購入は相関項としてそれを使用する瞬間をもち(…)、受話器を手に取ることは、相関項として受話器を置く瞬間を持つ」[10]と述べているのはロラン・バルトであるが、同様に、「借金」は相関項としてその返済、あるいはその取立て、差押え、売り立ての挿話をもつであろう。その一方で、「返済された借金は意味を喪失する」[11]のである。実際、返済される借金と返済されない借金とでは物語にはたす機能をまったく異にする。物語に於ける機能の面から考えると、「借金」は返済されるまでの期間においてしか「借金」たりえないことになる。このことを『感情教育』の「借金」についてみると、ここではそのほとんどが容易に返済されず、「借金」は長期にわたって機能を持続し、「行為の連鎖」を紡ぎだしていっていることに気がつく。

といってももちろん、全ての「借金」が「行為の連鎖」を引き起こしている訳ではない。第二部六章でロザネットがフレデリックに用立ててもらう500フランは、フレデリックを田舎から呼び寄せる機能しかもっていないだろうし、また、第一部三章のユソネのアルヌーに対する前借りもその場かぎりで、以後二度と物語には出てこない。この種の「借金」は「行為の連鎖」を生み出さない。これに反して、大部分の「借金」は純粋に「借金」として機能するかたちで現れる。そうした機能する「借金」をいくつかの事例について検討してみよう。

ロザネットがヴァトナ嬢から借用した5000フランから始めよう。まず、この借りはヴァトナ嬢のロザネットへの1000フランの取立となって顕在化し（第三部三章）、その取立が直ちにロザネットにアルヌーを訪ねさせる。というのも、かつてアルヌーが彼女に対してした株や会社の利益の贈与という約束は、ロザネットの心の中では彼に対する貸しとなっているからである――「だってあの男あたしに借りがあるのよ」(12)。ところが偶然にもこの訪問がフレデリックとアルヌー夫人の抱擁の場面におきるため、二人の抱擁は中断させられてしまう。こうして二つの借金――ロザネットのヴァトナ嬢への、アルヌーのロザネットへの――が結果としてフレデリックとアルヌー夫人との愛の成就を妨げることになるのである。結局ロザネットに対する借金の取立は、彼女を囲っているフレデリックへ向けられ、彼は彼女に代わってヴァトナ嬢の所へこの1000フランの返済に赴く。残る4000フランの借金にロザネットは心痛めて身を売るものの、第三部四章では、ヴァトナ嬢によって彼女の財産の差押えが請求される。この請求はまず、アルヌーがロザネットに以前渡した、陶土会社の株を譲渡する内容の手紙を思い起こさせて、彼女を会社へと走らせる。しかし手紙には有効性はなく株は既に売却されていた。そこで事を明らかにするために、ロザネットは現在のパトロンであるフレデリックに昔のパトロンのアルヌーを訪ねさせる(13)。一方で、4000フランの取立は物語から長い間忘れられていた作中人物にフレデリックを訪ねさせる。すなわち、デュサルディエが4000フランの借金の支払いを引き受けてくれるのである。彼は愛人ヴァトナ嬢がフレデリックの愛人ロザネットを相手に差押え請求をすることに悲しみ、爪に火をともして貯めた虎の子の4000フランをフレデリックに用立ててやる。デュサルディエは程無く死んでしまう以上、この借金は返済されず、その結果、4000フランの借金によってこれまで玉突き状に引き起こされてきた「行為の連鎖」はようやくここで終結する。こういう具合に、一つの「借金」は他の「借金」と結びつきながら、作中人物を邂逅あるいは離別させ、それぞれの関係を緊密化もするし、また不和にもする。そうした離散と集合自体が「行為の連鎖」を形成していくのである。

しかし何といっても、「借金」が最も強力に「行為の連鎖」を引き起こすのは、返済不能の「借金」が法的に取り立てられるさいであろう。というのも、この場合、破産と出奔という破局が控えているからである。第三部の後半で、アルヌーはミニョーを瞞着して50000フラン相当の株券を彼から預かるが、彼はそれを勝手に売り払って宗教用具商をはじめる。しかし、やがてミニョーから借金の約四分の一にあたる12000フランの24時間以内の支払いの履行を法的に求められる。アルヌーのミニョーへのこの借金（より正確には詐欺）はフレデリックを金策に走らせる。なぜならフレデリックはアルヌー自身にはこの借金が返済できないことを承知しているし、そうなれば、アルヌーは家族を引き連れてパリから逃げ出さざるを得ないことを知っているからである。アルヌーの負債はフレデリックを婚約者ダンブルーズ夫人のもとへ走らせ、彼はデュサルディエを救うためと称して（実はアルヌー夫人を救うために）、夫人から12000フランを借り出し、

アルヌー家にかけつけるが、時既に遅しであった[14]。アルヌー一家の出奔後も「行為の連鎖」は継続する。ダンブルーズ夫人は、フレデリックが12000フランの借金にやってきた真の理由をたまたま知り、彼への復讐のために、昔の債券を使ってアルヌー夫人の家具の売り立てを準備するのである。アルヌー夫人のダンブルーズに対する4000フランの手形は、彼女が夫に署名させられたものであるけれども彼女には支払えず（第二部三章)、フレデリックの取りなしでダンブルーズに取立を延期してもらっていたものの、結局支払われなかったのである。こうしてアルヌー家のミニョーに対する借金は、フレデリックのダンブルーズ夫人への借金を引き起こし、さらにこれがきっかけとなって、忘れられていたアルヌー家の債務を物語に再登場させる。「借金」が作中人物たちを非情な力で走り回らせるだけではなく、「借金」それ自体の連鎖をも引き起こす物語上の事実が指摘される所以である。

「借金」の生み出す「行為の連鎖」、ひいては「借金の連鎖」は容赦ない力で物語を展開させながら、最終的には作中人物間の離別を惹起する。第二部でのアルヌー家の4000フランの借金は、長期にわたる時間的空白をおいたのちに、アルヌー夫人の家具の売り立ての原因となり、その売り立てが結果としてフレデリックに二つの離別を引き起こす。まずはロザネットと、次いでダンブルーズ夫人とである。

ロザネットの場合。あくまでもアルヌーに株券の贈与の約束等の履行をせまる彼女は、アルヌー相手に訴訟を起こすが、敗訴になる（第三部四章)。諦めきれない彼女はデローリエとセネカルに助けを求め、アルヌーが彼女に譲渡した株券を楯に、再度訴訟を起こし、ついにアルヌーを有罪に追い込む（第三部四章)。ところが、アルヌーへの有罪判決はアルヌーよりもむしろロザネット本人に打撃を与える。というのは、アルヌー夫人の家具の売り立て人セネカルは、ロザネットがアルヌー相手の訴訟の件で利用した人物であったことから、この経緯を知っているフレデリックは、ロザネットこそアルヌー夫人の動産の売り立て請求をした張本人と信じ込んで、彼女と永遠に別れてしまうからである。つまりこの手切れは、３つの借金―アルヌーのロザネットに対する、アルヌーのミニョーに対する、アルヌー家のダンブルーズ氏に対する―と、そしてフレデリックの誤解とによって引き起こされた、長期にわたりかつ錯綜した「行為の連鎖」の帰結に他ならない。

ダンブルーズ夫人とフレデリックとの離別は、アルヌー夫人の家具の売り立ての場面に引き続いて起こる。この場面でダンブルーズ夫人は、フレデリックに復讐するべくアルヌー夫人の小箱を競売で落札する。ショックを受けたフレデリックは、非情なダンブルーズ夫人に立腹して彼女と手を切る。夫人との離別は、アルヌーのミニョーに対する5000フランの負債とその取立としての12000フランの請求、その結果生じたダンブルーズ夫人からのフレデリックの12000フランの借金、さらには、この借金がダンブルーズ夫人に思い出させたアルヌー家のダンブルーズ家に対する4000フランの債務、そしてそれを使ってのアルヌー夫人の家具の売り立て、これら「行為の連

鎖」の帰結である。

このように、「借金」は容赦ない力となって作中人物に次から次へと襲いかかり、彼らを玉突き状に行動へと駆り立てて、偶然や誤解と相まって連続的にさまざまな行為を引き起こしていく。しかも、二、三種類の「借金」が複雑に重なり合いたがいに影響を与え合って、思わぬ方向へ物語を展開させながら「行為の連鎖」を紡ぎだすことになるのである。

## II

では、「借金」が引き起こす「行為の連鎖」は、小説空間においてどのような機能の様態、さらには効果を持っているのだろうか。

「借金」の取立が作中人物の人生に関わる大事件であるとするなら、その取立は必ずと言っていいほど予告と潜在化のプロセスをとる。ロザネットのヴァトナ嬢に対する5000フランの借金に関しては、第三部一章の二人のいさかいの折に仄めかされて、取立が予告され、暫く潜在化した後に、第三部三章で1000フランの取立となってロザネットに襲いかかる。さらに、残額4000フランの手形の方はロザネットを不安にさせながらも、潜在化したままで、第三部四章まで効力を発揮しない。また、アルヌーのミニョーに対する取立も、第三部四章で予告されるけれども、実際にアルヌーが告訴されるのはその章の最終部分でである。また第二部でアルヌーがロザネットにした贈与の約束（ロザネットにとっては貸し）も、物語から暫くの間忘れられ、第三部の三章へきてようやくロザネットに思い起こされるものの、彼女の取立が本格化するのは第三部四章でしかない。アルヌー夫妻のダンブルーズに対する手形についてはすでに触れた。第二部三章において支払い期限を迎えるこの手形の挿話は長い期間忘れられ、第三部の五章まで物語空間には現れてこない。「借金」はまさにこれらの沈黙、あるいは空白において機能するといっても過言ではないだろう。マルセル・プルーストが賞賛した[15]第三部の五章と六章の間に流れる時間的空白は、松沢和宏も指摘しているとおり[16]、まさにアルヌー夫人がフレデリックに返済する金額を用意するために必要な期間に相当する。またロザネットはロザネットで、ヴァトナ嬢に借りた金が取り立てられる以前に不安に陥れられる――「それは（＝気になっているのは）前に署名した五枚の手形の事だった」[17]。潜在化した「借金」が、物語のクライマックスにたいする見事な伏線となっているのである。

予告されながら物語空間からしめだされていた「借金」のほとんどは、第三部の後半部になって一斉に顕在化してくる。ロザネットに対するヴァトナ嬢の５千フランの請求、ミニョーのアルヌーにたいする取立、ロザネットがアルヌーにせまる約束履行、アルヌー夫人の未払い手形を利用してダンブルーズ夫人が強行する売り立て、すべては第三部の後半の出来事である。しかも、これらの借金はどれもこれもアルヌー一家とロザネットによってなされたものであるにもかかわらず、いずれもフレデリックの身に降りかかってくる。これは一体どうしたわけであろう。

ところで、ジャンヌ・ベムは、『感情教育』を「愛の小説よりもむしろ、疎外の小説である」[18]と指摘し、フレデリックはアルヌー夫人を自らの封建君主とすることによって、彼女に従属し、自由を奪われている[19]という興味深い考察を行っている。もっとも、フレデリックが所有されるのはアルヌー夫人によってだけではないだろう。物語の第三部で、彼がロザネットを愛人として囲ったあと（所有したあと）、こんどは逆に彼自身がロザネットのペースに完全に巻き込まれる――「フレデリックは今では彼女のもの、所有物だった」[20]。それゆえフレデリックは、いわば運命共同体となっている二人が経済的危機に陥る度ごとに、彼女達を救うべく金策に駆けずり回る。つまり、フレデリックの愛――真面目であろうと、不真面目であろうと――を媒体にして、物語のすべての「借金」が彼のところに収斂してくる仕組みになっているのである。例えば、ロザネットが「借金」を取り立てられたとき、フレデリックは、「金(かね)をさがさなくっちゃ」(Il va falloir chercher de l'argent!)[21]と言いながら金を探し、また、アルヌー家が債権者から12000フランの支払請求をうけたときには、「12000フラン要る」(Il fallait douze mille francs)[22]とひとりごとを言いながら金策に走るのである。ここに使用される非人称構文は、女性と金銭の影響力に隷属しているフレデリックの存在様態をみごとに表現している。彼はまさに恋愛によって「借金」へと隷属されしばりつけられ、疎外されていく。その意味で、一つの疎外が別の疎外を呼び、彼は二重に疎外される結果になるということができよう。こうして人間疎外の構造がより一層強化され、フレデリックを否応なしに引きつける女性たちの引力と、「借金」というモーターが組合わされて、一層強力な一つのモーターとなって彼を有無をいわせぬ力で走り回らせることになるのである。

以上みてきたとおり、多くの「借金」の物語が結末を迎えて一気に一点に収斂する。まさにこれは、物語前半を支配していた「流れる水と河の上の船のリズムとイメージ」[23]が物語の最終部分に至って、にわかに加速度化していく過程に他ならないといってよい。事前に予告されながらも、潜在化を余儀なくされてきた「借金」の取立を物語の最後の部分で一気に顕在化させることによって、それまでフレデリックの夢想への逃避や待機、優柔不断、さらには空転する行動といった、いずれも非活動的な情熱を物語ってきた小説は、突如として緊張感をみなぎらせ、物語の結末へと容赦ない力で突き進んでいくのである。

では、この大きな推進力は一体どこへ物語を導いていくのだろうか。まず経済的な観点からみてみよう。「借金」というモーターはデュサルディエの財産の消失、アルヌー家の破産とパリからの逃亡、アルヌー夫人の家具の競売、そして最後にアルヌー家のフレデリックに対する負債の返済へと行き着く、つまり人物相互間で、経済的な意味での「清算」が行われる。「借金」の物語の行き着く先は、「借金」という容赦ないモーターのエネルギーの消失にほかならない。返済、あるいは破産や売り立てが完了すれば、もはや「借金」は消失し、いかなる機能も効果も持ちえないからである。

もちろんこの場合、「清算」は経済的ばかりではなく感情的な意味合いをも持つであろう。フレデリックは「借金」が引き起こす連鎖の帰結として、ともに愛人であるロザネットとダンブルーズ夫人との関係を「清算」することになるばかりでなく、理想の愛を体現しているアルヌー夫人に対する愛情をも彼女との経済的清算と同時に終熄させてしまう（第三部六章）からである。経済的意味での「清算」と感情的意味での「清算」が、たがいに深く影響し合いつつ、同時平行的に行われるという物語上の事実に注目したい。

## おわりに

「物語には、いわば真の自己保存本能というものがあって、言表されたある行為が導く二つの可能な結果のうち、筋を《新たに展開させる》ほうを常に選ぶのである。」(24)とロラン・バルトは、物語における「行為の連鎖」に関して述べている。彼はさらに、こういった「構造的な決定作用」に対して、芸術の役割は「(…) 心理的、倫理的、感情的な動機などといった保証（アリバイ)」を作中人物の行為に与えることである(25)、と見事な分析を示す。本論での考察をいまのバルトの指摘と照らし合わせてみると、物語を展開させる推進力としての「借金」が、一個の小説世界において、物語の自己保存本能という「構造的な決定作用」に完全に従いつつ作中人物の行為に最大限の動機を与えている、そのありようが的確に浮かびあがってくるように思われる。返済されない「借金」は、当然のことながら、取立て、差押え、競売の物語を正当化し、物語に延命を可能にしているのである。もし、アルヌーがフレデリックに即座に15000フランを返済していたならば、物語の最後のフレデリックとアルヌー夫人の感動的な再会は行われなかったであろうし、その他の「借金」がどれもこれも返済されていたなら、うえに確認してきた錯綜する「行為の連鎖」は生じえなかったであろう。もちろん、この動機が作品の隅々まで張りめぐらされているとはけっして言いえないし、実際、この物語における偶然、あるいは運命の役割も無視できない(26)。それでもやはり、「借金」が作中人物に織りなさせる「行為の連鎖」の一大動機となっていることは否みようもないテクスト上の事実である。

このように、「借金」は作中人物に行動の動機を与えながら物語を延命かつ展開させ、結末まで導き至らせることによって、なんら外部の力によらない、純粋に作品の内的動力による物語の自律的運動に大きく寄与している。それだけではない。「借金」は第三部の後半に一斉に出現し、物語がいよいよクライマックスへと向かう緊迫感の劇的効果を演出しつつ、経済的のみならず感情的意味での「清算」にも物語を導き、前半にくらべてさらに一層徹底した人間疎外の物語を織りなす、というきわめて重要な役割を果しているといって差支えないように思われるのである。

### 註

(1) Lettre à George Sand[12 janvier 1867], Flaubert: *Correspondance III*, édition établie, présentée et annotée par

Jean Bruneau, «Pléiade», Gallimard, 1991（以下、*C. III.* と略記）, p.591.

（2） Louis Aragon: *Blanche ou l'oubli*, Gallimard, 1967, p.45.

（3） Pierre Bourdieu: *Les règles de l'art*, Seuil, 1992.

（4） Lettre à Louise Colet [7 septembre 1853], Flaubert: *Correspondance II*, édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, «Pléiade», Gallimard, 1980（以下、*C.II.* と略記）, p.426.

（5） フロベールは、書簡の中でみずからが理想とした小説世界についてくりかえし語っている。「僕が素晴らしいと思うもの、（…）それは（…）外部へのつながりが何もなく、文体の内的な力によってみずからを支えている書物」（Lettre à Louise Colet [16 janvier 1852], *C.II.*, p. 31）、「芸術は空間に位置する神の如く、無限の中に宙づりになったまま、それ自体で完璧なものとして、作者から独立していなくてはなりません」（Lettre à Louise Colet [27 mars 1852], *C.II.*, p.62）、「散文の立派な文章は、見事な韻文のようでなくてはなりません。つまり、同じくらいリズム感があって、同じくらい響きが豊かで、一字たりとも変えられぬものでなくてはなりません」（Lettre à Louise Colet [22 juillet 1852], *C.II.*, p.135）。

（6） Lettre à Flavie Vasse de Saint-Ouen [27 décembre 1864], *C.III.*, p.418.

（7） Lettre à René de Maricourt [9 janvier 1867], *C.III.*, p.587.

（8） Lettre à Amélie Bosquet [27 août? 1867], *C.III.*, p.680.

（9） ヴァルター・モゼールによれば（Walter Moser: *L'Education sentimentale de 1869 et la poétique de l'œuvre autonome*, «Archives des Lettres Modernes», Lettres Modernes, 1980, pp.71-73）『感情教育』の自律性を可能にしているのは、「作家の不介入」、「作品の内的一貫性」、さらにそのうえでの「終わりが始まりを内包する構造」であるという。

(10) Roland Barthes: «Introduction à l'analyse structurale des récits», *Œuvres complètes*, tome II, édition établie et présentée par Eric Marty, Seuil, 1994, p.82. 北岡誠司氏によると（《ロシア・フォルマリズムと構造主義》, 『文学をいかに語るか――方法論とトポス――』（大浦康介編）, 新曜社, 1996, 185-207）、バルトは引用論文において「相関項」の「一般的・抽象的な機能」と「個別・具体的な現象」を混同して論じているというが、いずれにしても、我々はここでは「個別・具体的な現象」としての「相関項」に焦点をあてている。

(11) Jeanne Bem: «L'Educ' centime: recherches sur la signifiance dans *l'Education sentimentale*», *Romanistische Zeitschrift für Literaturgeschichte* (*Cahiers d'histoire des littératures romanes*), no.10, 1986, p.104.

(12) Flaubert: *L'Education sentimentale*, édition établie et présentée par Claudine Gothot-Mersch, «GF», Flammarion（以下、*E.S.* と略記）, 1985, p.430.

(13) 彼はアルヌー家の近くまで行くものの、遠方からアルヌー夫人の姿を認めると、とたんにきびすをかえす（*E.S.*, p.474）。

(14) しかしのちにアルヌー夫人から明かされるように（*E.S.*, p.501）、本当はアルヌー夫人はフレデリックが12000フランを持ってきた時、在宅していたにもかかわらず隠れていたのである。

(15) Marcel Proust: «A propos du «style» de Flaubert», *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition établie par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, «Pléiade», Gallimard, 1971, p.595.

(16) Kazuhiro Matsuzawa: *Introduction à l'étude critique et génétique des manuscrits de l'Education sentimentale de Gustave Flaubert —l'amour, l'argent, la parole—*, tome I, France Tosho, 1992, p.302.

(17) *E.S.*, p.439.

(18) Jeanne Bem: *Clefs pour l'Education sentimentale*, Gunter Narr Verlag, Jean-Michel Place, 1981, p. 11.

(19) *Ibid.*, p.13.

(20) *E.S.*, p.430.

(21) *E.S.*, p.472.

(22) *E.S.*, p.484.

(23) Albert Thibaudet: *Gustave Flaubert*, «tel», Gallimard, 1982, p.154.

(24) Roland Barthes: «Les suites d'actions», *op. cit.*, p.1258.

(25) *Ibid.*, p.1258.

(26) 『感情教育』における偶然と運命については、それぞれの以下の論文参照。Jean Bruneau: «Le rôle du hasard dans *l'Education Sentimentale*», *Europe*, no.485-486-487, sep.-oct.-nov. 1969, pp.101-107; Jacques Proust: «Structure et sens de *l'Education sentimentale*», *Revue des Sciences humaines*, janvier-mars 1967, pp.67-100.